

宗教部門における女性学の研究動向

「宗教とジェンダー」研究は、実際にはどのような主題を扱っているのだろうか。伊藤セツらは、日本における女性学の初期の本格的テキスト『女性学』において、今から見ればやや古い文献ではあるが、1987年にアメリカ合衆国で出版された女性学の文献紹介書『ウィメンズ・スタディーズ：推薦基本文献 1980 - 1985』の内、宗教に関連する約100冊を便宜的に以下のように分類している⁽¹⁾。

A. 伝統的な宗教共同体のあり方を社会の変化に照らして吟味したもの：これには、カトリック、主なプロテスタント諸教派、ユダヤ教、その他のプロテスタント諸派が対象となっている。

A-1) インタビューなどによる実態調査；たとえば、かつて修道女だった人、レズビアン修道女、女性牧師、聖職者の妻などに対する体験調査。神学的、実践的フェミニスト・クリスチャンの性・仕事・社会・教会組織との関わり概観調査。平信徒女性の生活体験の記述。ユダヤ教、モルモン教の女性の葛藤意識調査など。

A-2) 歴史的研究；今日の教会の生命と新たなヴィジョンを再形成するためという問題意識のもとに、アメリカ史の中でのユダヤ教、カトリック、プロテスタント諸教派の教会における女性の役割を問い直したもの。教会の中での女性の役割をめぐる歴史的葛藤と実態や、アメリカ女性の外国ミッション運動史などがある。

B. 宗教に関するフェミニスト著作家・研究者の著作：ここでは、エッセイから学術研究書まで、R.R. リューサー、M. デイリー、P. トリプル、E. シュスラー＝フィオレンツァ、E. パゲル、R. グロス、A. キャンター、N.R. ゴンデンベルグ、スターホーク、Z.E. ブダベスト、C.P. クライスト、J. プラスコウ、L.M. ラッセル、K.G. キャノン、M.A. フェアレ、A.Y. コリンズ、C. ヘイワード、N. モルトナゲラ、V.R. モレンコット、M. フレンチ、E. マックローリン、S.D. ヴェルなど多数の女性の名前が連なる（註：人名表記ママ）。

B-1) 宗教領域におけるパイオニア的フェミニスト著作家の紹介；フェミニスト活動家・神学者による宗教的エッセイ、教説、講話、礼拝式の詩など。

B-2) フェミニスト神学者の学術的研究書；従来の文化の中からも女性にとって有用な伝統を導き出すための聖書学・教義学の検討。

C. 女性のための礼拝・儀式の創造：従来の典礼は、女性にとって創造的なものではなく、すべてセクシストの男性によって形成されたものであるとして、ノンセクシストによる女性のための新たな儀式の形成を試みている。

C-1) 神の男性的イメージの破壊；女神の研究に連なる。

C-2) 典礼言語の創出

D. 女性の精神性、霊性の要求：興味深いことに、ここでは特に「母性」との関わりが重要となる。

E. 非西洋的宗教における女性の、歴史的・比較文化的研究；キリスト教文化のなかのセクシズムに苦しんでいる女

性にとっては、女性の宗教生活のモデル探しでもある。

E-1) 非西洋文化における女神・女性神官・巫女などの比較研究。

E-2) 歴史的研究；太古の多神教から一神教への移行。多神教の中での先史的女神と神の比較。ジェンダーと権力は解決不能なほどには連動していないことが導き出されている。

フェミニスト神学の位置づけ

これらの研究動向は、あくまでもアメリカ合衆国における1980年代という限定的なものに過ぎないが、宗教とジェンダー研究の基本的な傾向を窺い知ることはできる。注目すべきは、女性学の宗教部門にフェミニスト神学がきちんと位置づけられている点である。日本ではフェミニスト神学は、どちらかと言うと女性学の主流とは別のところで研究が積み重ねられてきたように思えるが、アメリカでは両者が相互に影響し合っていることが分かる。もともとここでのフェミニスト神学は、キリスト教のフェミニスト神学が主として想定されており、それに対しては黒人女性によるウーマニスト Womanist 神学、ヒスパニック系のムヘリスタ Mujerista 神学など、マイノリティからの批判もなされているが、少なくともこの分類表には明確に表れていないようである。またフェミニスト神学はキリスト教が独占するものではない。R. R. リューサーも『性差別と神の語りかけ』の中で指摘しているように⁽²⁾、アジアやアフリカの諸宗教においてもフェミニスト神学は可能であるし、それらはキリスト教のフェミニスト神学と対等な関係にあると言える。イスラームのフェミニスト神学、ヒンドゥーのフェミニスト神学、仏教フェミニスト神学、そして新宗教のフェミニスト神学もありということである。

さらに1980年代アメリカに端を発する「ケアの倫理」論争もおそらくはその背景の一部となっている「母性」をめぐる問題や、新たなモデルを模索するための「女神」再考（あるいは再興＝ルネサンス）が重視されているが、これらを直接日本の文脈に持ち込むのではなく、東西の比較研究という形での考察には意義があると思う。

ここでこれらを参考に「宗教とジェンダー」研究の考察領域を暫定的に羅列してみると、①制度や組織における女性聖職者の排除の問題 ②聖職者の配偶者の問題（牧師夫人や寺族など）③女性教祖、女性預言者、女性布教師の役割および比較研究 ④女性の規範 ⑤各聖典における性差別的表現や翻訳語の問題 ⑥儀礼 ⑦女神、母性、女性と環境 ⑧マイノリティの視座、などが挙げられる。各テーマは相互に関連しているだけでなく、個別宗教に限らず宗教を横断する問題でもある。

[註]

(1) 伊藤セツ他編『女性学』同文書院、1992年。Loeb, Catherine R., Searing, Susan E., Stineman, Esther F.: *Women's Studies. A Recommended Core Bibliography 1980 - 1985*, Libraries Unlimited Inc., Littleton, 1987.

(2) R. R. リューサー『性差別と神の語りかけ』新教出版社、1996年。